

北九州市の文化財を守る会

会報

No. 54 61. 2. 5

発行 北九州市の文化財を守る会
北九州市小倉北区鍛冶町一丁目7-2
森 鷗 外 旧 居 内
電話 (093) 531-1604
印刷 博文堂印刷所
北九州市小倉北区長浜町2-22
電話 (093) 511-1011

《座談会》

永照寺

出席者
(発言順・敬称略)

Table with 2 columns: Name, Position. Includes 永照寺住職 村上充生, 九州大学名誉教授 小林安司, etc.



改築された「小倉御坊」永照寺の表門

北九州市の文化財を守る会が発足してから、今年で二十年ほどになります。地域のいろいろな文化財が破壊されないよう守っていくと同時に、文化財に対する知識と意識というものが、そういったものを市民のあいだに普及して、勝れた伝統を持つ北九州の歴史的名ものを継承しながら、将来とも持続させて、地域の発展に寄与したい、というのが私たちの考えです。市内にはたくさん文化財があり、私たちがこれらを取り上げて会報で紹介したりなど致しています。ただこれまで人々との生活関連が深いにもかかわらず、寺社関係の取り上げが少なかつたようです。今後でき得ればシリーズとして取り扱っていきたく思っています。お寺やお宮が宗教的な布教活動をするのは当然ですが、そういうことだけでなく、地域の人々と精神的な連帯を持っており、市民の生活文化の一つの根拠でもあったと云えます。寺社の建造物自体が文化的意義を持っています。歴史的あるいは美術工芸的にも価値ある文化財を持っています。これらは地域の歴史の証言者として重要なものです。国民共有の財産でもあります。こうしたお寺やお宮を地域とのかかわりあいのなかから明らかにし、文化的意義を考えていきたいと思います。きょうは、特に小倉と

永照寺の歴史と小倉御坊

司会 まず、住職から、簡単に永照寺の歴史についてお伺いします。

村上 お手もとに「畧縁起」をお配りしていますが、永照寺は明応四年九月二十八日、本願寺第九代目の実上人からご本尊を受けました。浄土真宗本願寺派としては、九州で二番目の古い寺です。同じ年の同じ日に、行橋の今井に浄喜寺があり、いまは東本願寺派(大谷派)になっていますが、十四代までは村上姓で、みんな一族です。永照寺は当時、室町にあったと記録されていますが、慶長十三年(一六〇八年)細川忠興が小倉城築城の際、現在の地に移転し今日に至っております。本堂も同じ年に完成していますが、現在の本堂は弘化二年(一八四五年)に改められて百四十年を経たものです。歴史はさかのぼりますが、大阪の本願寺の石山合戦で織田信

呼野の金山

主として吉原鉱山の盛衰

山本公一

吉原鉱山は、北九州市小倉南区呼野地区にあった。地形は、鉱区東部を走る小倉・田川構造線を境として、東側は石灰岩からなる平尾台を構成するカルスト地形をなし、西側は古生層および火成岩が分布し、一部は不規則な稜線をなしているが、鉱区内の地形は比較的緩やかである。鉱区内は国道三二二号線(往時は秋月街道)が走り、開発、運搬に便利であり、立地条件としては恵まれていた。このような条件の吉原鉱山も、戦後、大連産産業、続いて日本磁石選鉱株式会社となり、昭和三十年後半より、四十年代にかけて隆盛を極めたが、四十六年九月九州鉱山界の雄、三菱の横峰鉱山(宮崎県)大分県の鯛生鉱山の閉山に伴い、油木ダムよりの導水管が鉱区を従断という、致命的な要因があったとはいえず、閉山の止むなきに致ったのであった。

沿革

吉原鉱山を中心とした一帯は、和銅年間(七〇八年〜七四四年)から稼行されたと伝えられている。だから、鉱山の守護神である、山の神社(大山祇神社)の境内に

七太郎氏の経営となり、本鉱山の最盛期を迎えた。この為か、吉原鉱山の隆盛を記念して、川上金作氏を筆頭世話人として六十人からなる、陸軍中将白水淡書による、左記の碑文の顕彰碑が、旧香春街道の国鉄日田線と立体交差する国鉄金辺トンネル入口の辺に建立されている。その碑文は(碑は自然石)「明治四十一年一月岡山県児島郡下津井町人中西七太郎息貞丸郎氏松本郡中谷村大字頂吉起鉱業称吉原鉱山是地筒極産盛云而記録不存不能知其詳因郷人所伝則録数条走東西就中吉原明治八年以降繼續産出含金銀銅多量雖降不至極基産床状態而中絶中西氏起業他使同郷人岩津清三郎当其任氏者多年從事斯道富經驗者也又使同郷人妹尾卯一専主坑内整備而明治四十二年十一月中旬漸会産塊於是投多額資充設備益極盛明治四十五年二月東谷村大字呼野字大道第二運搬排水坑與本坑口底貫通乃為行通便宜移産業所是也大正二



吉原鉱山記念碑

昭和十年に真銅由造氏、同十三年には朝鮮製練練によって、戦時中の銅の需要にこたえるべく、採掘がなされたことである。ついで戦後は昭和二十一年十月より、古賀義夫氏の経営する大連産産業の所有

編集後記

今回の当番は小倉南区になっていましたが、支部長である中村徳氏が家庭の都合で東京に行き長期にわたり滞在されねばならぬ事情となりましたので、区の企画会議も開かれなまま延引してしまいました。前回に引続き事務局や皆様方にたいへん迷惑をおかけしたことをお詫び致します。(溝口 連)

長が攻めあぐねた難攻不落の石山本願寺の城造りは、浄喜寺三代目の良慶がそのブレンとなっていました。そんなことで細川が豊前に入国したとき、良慶に命じて、小倉の町づくりをやらせたと云われています。

司会 永照寺を中心として多くのお寺を一所に集めて寺町をつくり、小倉城を防御する皆の役割をさせたと考えられますね。ところで室町に在った時代の記録はないでしょうか。

村上 記録は残っていませんが、三代目の西蓮のときでしょう。やはり寺を集めて、攻め難い町づくりに寄与しているようです。

司会 永照寺は豊前国における真宗触頭として、当時から小倉藩や中津藩の領域で最高の地位を持つお寺であったわけですね。

小林 明治四年の地図を見ますと、寺町には真宗・浄土宗・日蓮宗など当時十数ヶ寺があったようです。

なかでもやはり永照寺が中心で広い寺域を持っていますね。

村上 昭和二十八年に宗教法人になったとき、明治五年、国に上地した寺地で、寺本来の目的に使用していた土地については国より譲渡になり、永照寺のものになりましたが、それ以前はまだ随分広がったようです。

小林 私たちの小さい頃は、永照寺を「寺町の御坊さん」といって親しんできたものでしたが、戦後は都心の寺町の寺が動いてしまっていて、小倉の古い寺町の景観は失われてしまったようです。しかし永照寺だけは動かず歴史の重みを物語っておるわけです。

村上 そうですね。京町と鍛冶町には西願寺や真浄寺もあります。昔の寺町では永照寺だけです。明治五年に末寺、寺家をそれぞれ独立させたので、現在残っているのは東谷、中谷、山路、中原、日明、葛原、伊川、猿喰、黒川、大里新町といった昔の村々が主になっています。

中村 永照寺の建物は建築史的にみて簡単に片付けられないものがあります。輪蔵だけは県の文化財に指定されているが、本堂・太鼓堂などたいへん価値のある建築物ですが、なんら指定されていません。この本堂は百四十年も経っており、いまこれを建てるとしたら、材料を集めることだけでも大変でしょうし、集まらないでしょう。北九州の文化史上、非常に大切なものと思います。壇家が全部城下の者だけかどうか、ちよつとそこを聞きたいのをお聞きしたいのですが。

村上 壇家は元文五年八月の上書に「当寺の末寺に属するもの百二十有九ヶ寺（各々豊前、筑前、肥後、長門の四州に在り）又当寺の管下に属するもの（管下を以て俗に触下と唱す）四十有四ヶ寺（各々豊前六郡に在り、なり）」とあり、またこれでも作者がはっきりしませんが、初代から十二代までの歴代住職の画像があります。主なものはそうしたもので、そのほかのものも開基五百年事業に向けて整備中です。

司会 本堂でやるのでしたら、どこかの許可もいらないわけですから、やりましょう。

小林 森鷗外の「小倉日記」をみると、永照寺に鷗外が徴兵検査の視察に来たことが記され、また小倉市議会も最初の頃に永照寺で開かれたこともあったようで、永照寺が市内の中心にあって、いろんな役目を果たしています。そうしたわけで、永照寺は小倉の寺町の象徴であり、また市民の誇りでもあったわけです。永照寺展の企画は、このことを市民に知って貰ういい機会だと思えますね。

新しい町づくりの中で
中村 いつ頃から寺町が解体したのですか。

村上 小説風に書きかかったものがありますが、いまはまだその

北九州市の文化財を守る会報

りますように、幕末まで全部永照寺に直属していました。これを六坊に別けて、永照寺の事務を分掌させて末寺では勝手に処理できないシステムになっていました。六坊というのは東雲寺・明信寺・安楽寺・西宗寺・西楽寺・法泉寺の六ヶ寺です。別に永照寺の隠居寺の法輪寺も関係の寺です。それを明治五年に末寺、寺家をそれぞれ独立させたので、現在残っているのは東谷、中谷、山路、中原、日明、葛原、伊川、猿喰、黒川、大里新町といった昔の村々が主になっています。

中村 そうしますと、やはり九州北東部と山口県を含めたカルチャーの中心をなしていたようですね。そういう貴重な建物が一カ寺しか残っていないのだから大切に保存しなければならぬと思います。

小林 御坊というのははたいたいたもので、ほかにあります。本願寺の出張所みたいなもので、勅願寺の格式をもつため、五筋堀、菊の紋章を用いることを許されていますが、九州では四日市御坊（現在本願寺四日市別院）と小倉御坊の永照寺だけです。

村上 御坊というのは、本願寺の出張所みたいなもので、勅願寺の格式をもつため、五筋堀、菊の紋章を用いることを許されていますが、九州では四日市御坊（現在本願寺四日市別院）と小倉御坊の永照寺だけです。

世代交替と民衆との接点
司会 これまでの話で、若い世代の大久保さんはどう思われますか。

村上 やはり戦後に小倉駅が旧駅からこちらに移転してきたことが、大きな原因でもあります。

中村 無軌道に開発された気味がありますね。新しいもののなかで、古いものを生かしていくということがなされていなかったように感じます。

大久保 戦災復興区画整理事業と現在の区画整理事業によって全国の市街地の7/8割ほどが、整備されてきた訳です。急に新しい駅ができることで、それまでの数百年にわたってできた都市構造を変えたり、歴史を変えてしまふことはよくあることです。社会が古いものから新しいものに移って行くことはわかるのですが、生かすものと、そうでないものとのけじめは大切ですね。

中村 戦後の日本の都市づくりは、歴史的、民俗的、土俗的なものを全部捨て去るという思想のうえにやってきました。やはり、細川忠興が見た景色、小笠原忠真が見た景色、明治、大正の時代の人が見た景色が、昭和のわれわれが見ている景色のなかに、僅かでも残されていないか、若い者と歳とった者が結びつかないと思うんですが、そのために、歴史的な価値ある建築物は絶対に残す必要があります。

大久保 先日、僕は古い町家の改造のための設計をしましたが、

驚いたこと、七十五年もたった古い松材に香りが残っているのです。松がまだ生きて呼吸しているのです。これは現在の新材材がいくすね。これは現在の新材材がいくすね。これは現在の新材材がいくすね。

小林 この程、寺の再築された門に「小倉御坊」という新しい看板もかかると、歴史ある寺という感じがよくわかるようになってきましたね。永照寺という存在は市民の財産でもあるので、これまで市民があまり知らないことを、知って貰うことに、われわれも協力を惜しみません。

司会 最後にひとつ、最近、駅前再開発が大きくクローズアップされておられる、小倉駅前の整備は必要ですが、これと永照寺との関連についてご意見をお聞かせ下さい。

中村 駅前の問題ですが、これを緑地化するような感覚で、古いものを入れた新しい町づくりを設定するのはないかと思えます。近くの京町に西願寺がありますが、あそこは西側の景観は、よい見本ではないでしょうか。再開発の主役が誰かという、その主役のあかしとなるものが永照寺ではないかと思えます。

大久保 今も生きついでている永照寺を、これからも生かすためには、HOW・TOWが重要なこととなります。市民ぐるみで考えるべきですが、周辺を整備し緑地公園化する、古いものと新しいものとを一体とした個性のある景観づくりがされなければならないと

つたことに大きな問題がありますね。核家族化によって、おじいさんからお父さん、子供から孫へといった文化を受け継ぐルールがあったのが途絶えた。そのところをこれから考えなければいけない。

司会 現在お寺があるのですから、受け継ぐルールができれば、つなぎができておきます。

小林 歴代の住職のなかにはすぐれた方がいるようですが、六代の西吟は特に学問にすぐれた方ですね。西本願寺の能化といった学僧で、仏教教理の著述も多く、名僧鉄眼も学んでおり、また十二代の西成も「小倉永照寺版」を大阪から出版しています。郷土史家の吉永雪堂翁も「永照寺学園」と呼んでいるほどですから、これは当時の小倉の城下町でもめずらしいことだと思えます。

たことには、お寺があるのですから、受け継ぐルールができれば、つなぎができておきます。

たことには、お寺があるのですから、受け継ぐルールができれば、つなぎができておきます。

たことには、お寺があるのですから、受け継ぐルールができれば、つなぎができておきます。

思います。ハードな都市景観ととも、どのように永照寺を市民の広汎な活用のもととするかというソフトなことを市民レベルで考えるべきです。

小林

再開発となると、ある程度、ビルの谷間になるわけですね

中村

私は東京生れですが、いま帰って来て、子供時代みていたものがなにもと残されてないというものは淋しいものです。

司会

次の世代の子供たちが成長したときに、美しい線画を持った屋根瓦のある古い建物があるというところは、そこに故郷があるということですからね。

村上

金をだせば大きなビルがいくらでもできるが、金をだしてもできないものがあります。文化といった精神的なものがそうですが、そのために、この土地で、この木造の建物を残すことに力をそそぎたいと思っています。

小林

力強い決意をうけて、心強く感じます。この意味を市民がよく知り、永照寺を残して行きたいものです。

司会

ご多忙のところ、非常に貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。

小林

力強い決意をうけて、心強く感じます。この意味を市民がよく知り、永照寺を残して行きたいものです。

司会

ご多忙のところ、非常に貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。

小林

力強い決意をうけて、心強く感じます。この意味を市民がよく知り、永照寺を残して行きたいものです。

司会

ご多忙のところ、非常に貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。

小林

力強い決意をうけて、心強く感じます。この意味を市民がよく知り、永照寺を残して行きたいものです。

司会

ご多忙のところ、非常に貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。

小林

力強い決意をうけて、心強く感じます。この意味を市民がよく知り、永照寺を残して行きたいものです。

司会

ご多忙のところ、非常に貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。

小林

力強い決意をうけて、心強く感じます。この意味を市民がよく知り、永照寺を残して行きたいものです。

司会

ご多忙のところ、非常に貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。

小林

力強い決意をうけて、心強く感じます。この意味を市民がよく知り、永照寺を残して行きたいものです。

司会

ご多忙のところ、非常に貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。

小林

力強い決意をうけて、心強く感じます。この意味を市民がよく知り、永照寺を残して行きたいものです。

司会

ご多忙のところ、非常に貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。

小林

力強い決意をうけて、心強く感じます。この意味を市民がよく知り、永照寺を残して行きたいものです。

司会

ご多忙のところ、非常に貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。

小林

力強い決意をうけて、心強く感じます。この意味を市民がよく知り、永照寺を残して行きたいものです。

司会

ご多忙のところ、非常に貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。

小林

力強い決意をうけて、心強く感じます。この意味を市民がよく知り、永照寺を残して行きたいものです。

司会

ご多忙のところ、非常に貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。

小林

力強い決意をうけて、心強く感じます。この意味を市民がよく知り、永照寺を残して行きたいものです。

司会

ご多忙のところ、非常に貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。

小林

力強い決意をうけて、心強く感じます。この意味を市民がよく知り、永照寺を残して行きたいものです。

司会

ご多忙のところ、非常に貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。

小林

力強い決意をうけて、心強く感じます。この意味を市民がよく知り、永照寺を残して行きたいものです。

司会

ご多忙のところ、非常に貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。

小林

力強い決意をうけて、心強く感じます。この意味を市民がよく知り、永照寺を残して行きたいものです。

司会

ご多忙のところ、非常に貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。

小林

力強い決意をうけて、心強く感じます。この意味を市民がよく知り、永照寺を残して行きたいものです。

司会

ご多忙のところ、非常に貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。

小林

力強い決意をうけて、心強く感じます。この意味を市民がよく知り、永照寺を残して行きたいものです。

司会

ご多忙のところ、非常に貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。

小林

力強い決意をうけて、心強く感じます。この意味を市民がよく知り、永照寺を残して行きたいものです。

西明寺経筒

谷端勲

小倉城の影を宿して海に注ぐ紫川を、南に一〇キロメートル余り遡ると小倉北区大字山本の郷に至る、三方は青垣山で南の山稜上に福智山が一際高く望見される。

川の兩岸は田園で、東方の神畑城址の麓に老樹古木が繁り、中に鎮る西大野八幡神社(旧称 大野八幡宮)の銅板葺きの屋根が隠見する。

向い合って、西方約一キロメートルに一段丘があり、その上に納骨堂が建っている。

堂の一段上の台地が聖泉寺の寺跡で、往古の西明寺の伽藍跡である。この地を里人は今も字名を『ガラン』と呼称して居り隣接の孟宗竹林の中には、布目のついた瓦の破片が散在し、昔時の名残を伝えている。

水上山麓に建つ聖泉寺の裏手、山裾の畠地より偶然に、天明年(一七八一)頃、経筒が掘り出された。既に封土等、経塚の形状は無かった。今より二〇〇年前の事である。

記録によると、その経筒には左記のような銘文が六行に陰刻されているという。

『豊前国規矩郡大野庄西明寺』

「綿屋又作が干(ハ)年の十二月二十七日に西国(九州)より帰って来たので、久方振りに面談した。豊前国小倉町で購入したという経筒を見たが、珍らしい逸品の『銅立』であった。経筒(西明寺経筒)の銘文も古いもので、年号・銘文を書き写した」

と誌されている。(この銘文が初めに引用して掲げた銘文である。)

この本によると「昭和初年に、企救郡の人、新屋力三氏所有」と書いてあるが、現在の保管者は何という人であろうか。幸い、本年新春早々、市の考古博物館で催される「経塚遺宝展」には里帰りして出品される由、鶴首している。

ずっと前のことであるが、この経筒の出土地点について、故木島甚久氏(香春町採銅所出身)から数回、(私が地元であるからと言うので)尋ねられた。私はその度に調査をしたが、なかなか判らなかつた、その中に木島氏は故人となつてしまわれた。

昭和四十二年の八月―お盆前の或る日、聖泉寺(去る三十八年六月の火事により、下段の川添の地に移転再建されていた)に参詣して、旧知の坊守・根本カメさんから住職伝承・部外秘の経筒発見場所を現地案内されて教示していただいた。その上、寺に帰つて

奉書写供養妙法蓮華經一部十巻右経為自他法界平等利益

寛治元年歲次丁卯十一月廿二日辛未

勸進僧 延照 鑄師僧 頼源

規矩(企救)郡大野庄は、小倉南区の南西部(旧時の東谷村・中谷村・西谷村の一部)に莊田を散在所有し、面積は、初期に四〇町歩(四〇ヘクタール)、後の建久六年(一一九五)には八〇町歩に拡大されていた。領主(領主)は宇佐八幡宮の神宮寺である弥勒寺(天平一〇年(七三八)八幡宮の境内に移転建立)であった。後年には領家は東福寺(至徳三年(一三八六)の文書)、小野田種尚(大永二年(一一五二)の寄進状)等の変遷があつたようである。

弥勒寺は九州一円に莊園を領有し、宇佐宮と共に、各々その所有する莊園等は一千町歩に及び威を張つていた時代がある。

政所は大野八幡宮と推定される立券(創立の免許状)年時は不詳であるが寛弘五年(一〇〇八)頃ではなからうかと思われる。

寺伝の古記録も拝見した。出土地は、元の聖泉寺の裏の畠を隔てた、古井戸の上の草生地(旧畑地)で、水上城の在った水上山の山裾の丘陵の一角、海拔一〇〇メートル余の高地で、墓地と雑木林に連なっている。

根本カメ女から聞いた話の大意は次の通りである。

「二〇〇年近く昔のこと、古井戸の上の段の畑に植えていた茶の株を、所有者の水上という農夫が移植しようと掘り下げてみると、つるばしの先に「カツン」と堅いものが当たった、石だろうと思ひながら更に掘り下げて掘り出してみると、古い銅の筒が出て来た。

高さ一尺(三〇センチ)足らずの経筒であつた、蓋を除くと中を見ると、紙の残り屑のようなものが入っている、筒身にも何か字らしいものが刻んである。早速、前方の聖泉寺に持参して住職(有正坊無門)に見て戴くと、年号の古い時代のものという、住職は年号等を書き写して経筒は水上某に返した。

水上某は「この経筒は、私の畑地から出て来た品物」といつて保管していたが、其の後、小倉の町に「薪売」に行つた折に「経筒は『銅立』といつて、花器に使用し、華道家や好事家に珍重され、高値で売買されて

西明寺は大野八幡宮の神宮寺で靈龜二年(七一六)の創建、寺名を最勝庵聖泉寺と号し、後に西明寺に改め天台宗に所属した。藩政時代には、虎蹊山聖泉寺と称し、初の臨濟宗妙心寺派であつたが足立の広寿山の末寺に替り、更に幕末より浄土宗西山派に移つた。

天明六年(一七八六)小倉藩士春日信映の集録した「小倉領寺院聚録」には「臨濟宗、小倉馬借町開善寺末寺、山本村、虎蹊山聖泉寺」と誌されている。

寺には、広寿山二代住持、法雲明洞の筆になる「聖泉寺」と誌した扁額を掲げ、本尊は十一面觀世音菩薩の木像座像、脇仏は聖觀世音菩薩座像木像と阿彌陀如来の木像二体、及び一本造りの手足を欠いた古仏像数体を安置していたが近年廢寺となり消滅した。惜しいことである。

仏像の多くは他寺に移されたと聞いている。

銘文中に法華經二十八品(章)を八巻にまとめ、無量義經一卷と觀音賢菩薩行法經一卷を合せて十巻と稱した。他の出土した経簡銘の中には全部十巻と刻字したものもある。また、このようにして経筒に納められた経文は、法華經の外阿彌陀經、般若心經、弥勒三部經(弥勒上生經、弥勒下生經、弥勒

いる)とさ込み、早速、小倉の町に持参し、或る店に二百両で売り渡したと伝承されて来た。

私の父(先々代住職)は「二百両で無く、二拾両であろう」と言つていた。又、祖父は「経筒は唐銅の立派な品物であつた」との口承を、度々、語つていた。

という話であつた。

聖泉寺伝来の古記録には、

「山ノ神、聖泉寺ノ境内二在り近年造立ス

一、聖泉寺、禅宗妙心寺派ニテ小倉開善寺ノ末寺ナリ

本尊 十一面觀世音菩薩ナリ御堂ハ東向

此地ハ 往昔 西明寺ノ伽藍地ナリ、天台宗ニテ 大野宮ノ社僧トナリタル由(中略)

一、近年 此ノ所ヨリ 唐銅(カラカネ)ノ経筒ヲ掘り出ス

銘文ニ

豊前国規矩郡大野庄 西明寺 寛治元年ノ年号有り

希(稀)代ノ名物(逸品)ナリ 応永年中 大友時代 断絶ス

一、大野八幡宮社 宇佐宮勸請社 社家大宮司ハ 宮崎氏代々

一、八幡宮社、昔ハ 高津尾ノ峯ニ降臨、今ノ神畑山上ナリ

古官所、山上七分程ニ少シノ宮地残レリ

(中略)

北九州地方は全国でも経塚の多い地域である、中央で埋経が行われ

と記してある。

右の文中に「近年掘り出ス」とあるので、経筒の出土年時が推定される。「希代ノ名物」とあるので、世にも稀な逸品なのであろう。「唐銅」の製法は、中国から伝わつたと言われ、銅と錫の合金で美しく、光澤がある。

この経筒は、出土してから五十年余り、小倉に在って、店頭にも飾られて、衆目にも触れたであろうし、有識者にも鑑賞されたのであろう。小倉の国学者として、又、金石文の大家としても知られた西田直養は、その著「金石年表」の中に、

「寛治元年 豊前国西明寺経筒」と記載している。

「金石年表」は、天保九年に、江戸・大坂・京都の三都で発行された。北九州市立中央図書館にも一冊、保管されている。

経筒による埋経は、近世には稀となつたが、十四世紀頃より行われた。一字一石の礫石経と経塚は近世に至つてもかなり行われた。西明寺経筒の出土地点に連接した墓地の墓石の下より、寺伝を使い、昭和四十二年八月に、礫石経、俗にいう「一字一石」「法華経石」が掘り出され、一時、聖泉寺に安置していたが、九月には元の場所に埋納した。約二升(四リ

Table with 3 columns: 法, 正法, 像法, 末法. Rows 1-4 with corresponding years: 1000, 1001, 1002, 1003.

惟時 天明四年辰八月 有正坊無文

成仏経)等であつた。なお、寛治元年(一〇八七)は今より約九〇年前に当る。当時、このように埋経が行われたのは、仏教の末法思想により、釈迦の入滅後、一千年(註)の間は、教・行・証の三つの具わつた正法の時代で、次の一千年は、教・行の二つだけで証のない像法時代の時代が、その次は末法時代で教が終了すると、教・行・証の三法は消滅して經典も失われて法滅の時代が来る、この時に弥勒菩薩が出現して仏教の法を説くという経説に準じたものである。この末法思想を信じ、永承七年(一〇五二)を末法の第一年とする考えは、寛弘四年(一〇〇七)藤原道長の吉野・金峯山上埋経以来、次々と拡がり地方にも埋経が流布して行われるようになった。(註)末法思想の各時代の年数については次に示す四つの説がある。そのうち一の説が最も多くの人に用いられたという。

秋月街道

小柳秀次



所名豊国 (村田成筆) より

香春口

ツトル)位の量であった。小石は碁石大から、今の五百円硬貨位の大きさのもので、表面に墨書したらしい形跡は認められるが、経文の漢字一字か、梵字一字か、よく判明しないほど薄れていた。小石は谷川か、川原のもので円形で球状を少し押しつぶした形状であった。納めたのは江戸時代と伝承されるが記録らしいものは何もない。聖泉寺住職の書写であろうか、寺では、いろいろの行事も伝承していた。

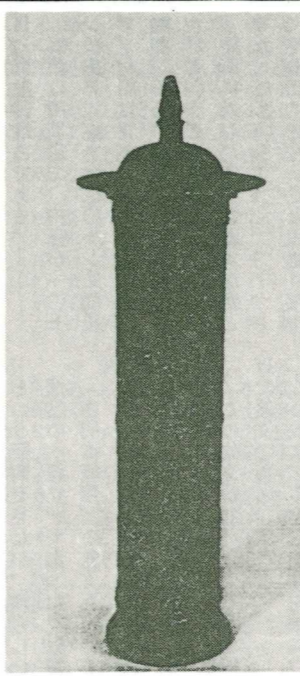
西明寺の規模・沿革も詳細にはわからない。まして経筒刻銘の、僧延照・僧頼源についても伝わっていない。

筑前の人・伊藤常足(つねたり)の「内志」によれば、西明寺は弥勒寺の末寺と推考される。

西明寺経筒に次いで古い、寛治八年銘の等覚寺経筒(京都郡荏田町)は、県指定文化財となっている。なお、西明寺の北、五キロメートル余りの蒲生と守恒より、永久六年(一一一八)銘の、平等寺経筒が出土していることを付記しておこう。

〔附記〕
今般、市立考古博物館で「経塚遺宝展」が催される。期間は一月十六日から三月九日までである。開催期日前に現場を確認し得ないで本文を脱稿せねばならなかったのは残念である。

遺宝展資料によると、今回展示される山本経塚出土の経筒・青白磁合子等は、本文の寛治元年銘の経筒と伴出した物であって、本文の経筒は現存しないと説明されている。何とかして再発見されないものかと待望して止まない。



「経塚遺宝展」に出品される。山本経塚(北九州市小倉南区山本) 鑄銅製経筒 総高二六、七釐

旧藩時代には小倉城下から通じる街道への出口には曲輪の一郭に石垣の枳形の中に嚴重な門が構えてあって、これに附随して有事に備えて寺院などの防禦造物が配されていた。

東、大里・門司に通じる海岸線の街道に門司口門、西南、黒崎方面に通じる街道に津口門(筑前口門)、これは長崎街道と称する重要な街道であるので、門の構えや防禦造物にも充分気が配られていた。

東、やや南より中津口門があって、東築より豊後方面へ通じる街道に開き、南東には香春口門があった。

香春口門は石垣の枳形の中で門は南面していた。ここには寺院は配されていないが、香春・田川郡方面に通じる街道がこの門に繋がっている。

細川忠興が領主となり、慶長七年(一六〇二)小倉城郭を新しい構想の下に大改築して後、この道を筑肥に繋ぐ街道として重要視し石原町・呼野・香春・猪膝の宿場を整備した。これから先、筑前に入って、大隈―千手―秋月と繋がっているの、この街道を秋月街道と刻み込んでいる文字は、

本宿・半宿について企救郡誌に載っている内山円治翁の説明を次に掲げることとする。

○本宿は他藩・国方の差別無く、諸侯江戶参勤交代上下公武の旅、小荷駄運送継立を為す。○半宿は他藩に一切関係なく、

国方用達荷物運搬継立を為す。

この街道は初めは徳力より板橋で紫川を渡っていたが、洪水毎に橋が流されて困っていた。享保十三年(一七二八)に、嵐山の下を切り開いて新しい道を作り、古川より加用に通るようになった。それで大水の時でも安心して通ることができるようになった。

日本全国を測量して廻った伊能忠敬が九州測量した時の日記から関係のある記録を拾って見ると、

文化六年(一八〇九)十二月二十七日六つ半頃赤間閣出立、四つ後豊前国企救郡小倉城下下着、

文化七年正月十二日、四つ頃雨止、夫より小倉城下船頭町出立、手分我等、同所宝町秋月街道三辻より初、即印石据込、

文化八年正月十六日朝より晴天、六つ後下首根出立、一同一手測、同所より初、葛原村枝新町、湯川村、水町村、上城野村、新村、片野村、小倉市中香春口門、馬借町魚町四丁目、船場町、宝町四丁目、三丁目、二丁目、去年正月十二日残印迄測、

同十九日午後、小倉城下出立、乗船して大里村へ八つ頃着、止宿、翌日、下関へ渡り江戸へ帰る)

文化九年正月二十五日小倉着、同七月十三日、一同彦山出立、末、九州一円の海岸線・島嶼・主

我等尾形は来十月、月食測量用意に直に小倉へ行、香春町止宿、同十四日、六つ後香春町出立、呼野にて中食、九つ後小倉城下着、

同十六日、月食を測、

文化十年十月十一日、六つ時前後香春町出立、手分、我ら、香春町止宿所より初め、下香春村、鏡山村、下探銅所村、探銅所町、上探銅所村、金辺峠、企救郡呼野村、本陣前にて昼休、先手初印に繋ぐ、街道(二里一十六町二十〇間三尺)

先手、小倉領豊前企救郡呼野村、駒場印より初、左に制札、石橋二間、小森村、市丸村、枝原・木下村、枝西・新道寺村、枝山・坂・石原町村・高津尾村、枝谷・徳光村、加用橋中八間、枝古川、徳力村、駒場昼休、枝原、枝紺屋ヶ原、守恒村、枝植松、北方村、枝新町、右へ曲れば大里道追分、野陣小休

城野村、新村三方追分(未正月十七日残置) 碑に繋ぐ

九州測量済み街道無測三里一十六丁〇八間、それより無測、先手は七つ前、後手は七つ後城下に着、止宿本陣

十月十四日、四つ時出船、海上三里、九つ半ごろ下関着

とある。忠敬は二回に亘り、正

要道路を実測しているが、その測り初めが小倉町の秋月街道分岐点であり、測り納めが、また秋月街道を香春から小倉に向けて測り片野新村三方追分になっている。

この街道筋は明治になって県道となり、昭和になって国道三三二号線となって、数次にわたる整備拡張されたため、道路や家並は殆ど往時を偲ぶすがを留めていない。一里塚も在った場所は大体見当は付くが、石標は一本も見当らない。ただ、道標や里程標が幾つか残っている。

徳力の神理教本院の境内に花崗岩の道標がある。高さ一四七釐、水平切口は一辺約二〇釐の正方形の角柱で、三面に左のよう陰刻してある。

「従是南田川道」
「従是北小倉道」
「従是東中津道」
「従是西里道」

初めに建てられていた位置は聞き出していないが、もつと北に寄った分岐点に建てられていたものであろう。

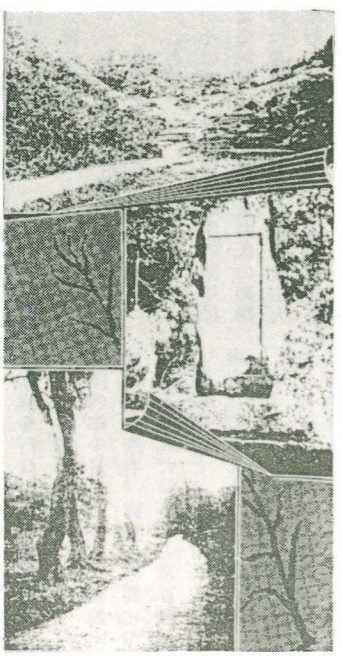
里程標は折れてはいるが石原町と呼野に残っている。ともに砂岩質の石で、高さ一六〇釐、水平切口一辺二〇釐ほどの正方形の角柱で、三面に刻字がしてある。

石原町の里程標には、
「従は大里迄参里貳拾五町」
「従是小倉迄参里貳拾四町」
「従は呼野迄 参里貳町」

と刻み込んでいる。昔は街道筋に面して大応寺の参道に向って右に立っていたが、惜しいことに四つに折れている。物故された前方が最上部分が紛失したので、他の三部分は境内のお堂の背後に倒して保管してある。

呼野の里程標は初めはお糸地藏堂の前にあったが、持ち帰って或家の溝の渡し石になっていた。沢村敏雄先生が市丸の校長の時に、それを貰い受けて、市丸小学校の校庭に建てられたこともある。昭和四十七・八年頃、呼野公民館が新築した際に、呼野町内会が貰い戻して、現在は呼野公民館前に建てられている。初めに建てていた所からいうと、国道三三二号線を越して反対側になっているが、ご

今年奇しくも丙寅の年であるが、慶応二年(一八六六)、丙寅の役には、八月一日小倉城自焼以來中津街道では狸山峠、秋月街道では金辺峠を最後の拠点として戦闘が繰り返された。藩庁のある香春を背後に控えているだけに、この街道筋の戦いは烈しかった。金辺峠、旧道脇の巨木林立した中に勇将島村志津摩の武勲を讃える石碑が厳然として建っている。



金辺峠南口 島村志津摩の碑

大正四年発行「小倉鉄道案内」より